

まち歩きが地域愛着に与える影響に関する研究

—長崎さるくを対象として—

A Study of the Influence of Town Walking on Place Attachment: Case Study of Nagasaki-Saruku

東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 37-126137 海野 碧

Some studies of attachment to place show place attachment develops the will to participate in urban planning or local activities. It is considered that town walking and town walking events let us know residential place and have attachment. This study aims to reveal the influence of town walking and town walking events on the place attachment through the survey in Nagasaki City and Nagasaki-saruku (town walking event in Nagasaki). The result showed that people who often walk around town have the stronger attachment and participate in Nagasaki-saruku more times than others. Moreover, in addition to the long-term residence, the frequency of town walking, the experience on Nagasaki-saruku and the obligatory walking in daily life have a positive effect on place attachment.

1. はじめに

(1)研究の背景と目的

地域における問題の解決や都市計画を考える中では、地域の活動やまちづくりへの住民の関与が重要である。一方、それらに参加するのは熱心な住民に限られてしまうことや、個人の利害関係やコスト等の社会的なジレンマの中で理解や協力を得るのが難しいという問題がある。その中で、地域愛着(place attachment)がその場所に対する関心や関与を生み出すものとして重要な役割を果たすと考えられている。

地域愛着は環境心理学や地理学、都市計画等様々な分野で研究がなされてきた。このような既存研究の中では、地域愛着が高い人ほど居住継続意思を示し地域活動へ積極的に参加する意思が高い¹⁾ことや、防災活動等に積極的に参加する²⁾ことや町内活動やまちづくり活動等の活動に熱心である³⁾こと等が示されている。つまり、地域に対する愛着が高まることで、都市における協力行動やまちづくりへの関与が促進されることが示唆される。

地域への愛着の醸成には、居住年数・年齢・性別、宗教等の個人属性以外にも、都市施設や自然環境等の物理的環境や慣習・祭事・治安・地域の情報といった社会的な環境も影響を与えていることが示唆されている⁴⁾⁵⁾。交通行動に着目すると、大谷・芳賀⁷⁾や萩原・藤井⁸⁾は日常的に利用する交通手段によって地域愛着に差が生じることを明らかにし、徒歩で外出している人の方が地域愛着が高いことを示した。

しかし一方で、徒歩の内容については十分に検討されていない。とりわけ徒歩の中でも、街を楽しんで歩く「まち歩き」を行うことが、街の魅力を発見し街を知るためのきっかけとなり、街に対して問題意識を持ち自ら街の

ために行動していくことに繋がるものと考えられる。

以上より、本研究では、「まち歩き」及び、人々がまち歩きをする場を整え提供する「まち歩きイベント」を取り上げる。まち歩き及びまち歩きイベントには、街の魅力の発見を通じて、また歩きたくなる、といったリピート効果が期待でき、街に対する愛着が生まれると推測する。こうした観点から、長崎市及びまち歩きイベント「長崎さるく」を対象として、人々が日常生活の中でまち歩きをどのように行っているかを把握し、まち歩きが地域愛着へ与える影響を明らかにすることを目的とする。

(2)概念の定義

本研究においては、まち歩きを「街をぶらぶら歩きながら自分で街を見たり感じたりして楽しむこと」と定義し、まち歩きイベントという特殊な場でのまち歩き(まち歩きイベント)と日常生活に楽しんで歩くまち歩き(普段のまち歩き)に分類する。更に徒歩を、1)日常的な活動(通勤通学・買物・飲食など)の実行のために生じる徒歩(日常生活での徒歩移動)、2)まちを楽しむことを目的とした徒歩(まち歩き)、3)運動を目的とした徒歩(ウォーキング)の3つに分類する(図1)。1)は派生需要性が高く、2)3)と行くにつれて本源需要性が高くなる。本研究では、まちや地域愛着への関心から2)に焦点をあて、併せてこれに関連すると考えられる1)の実態(頻度)についても尋ねた。3)は本研究の対象外とした。

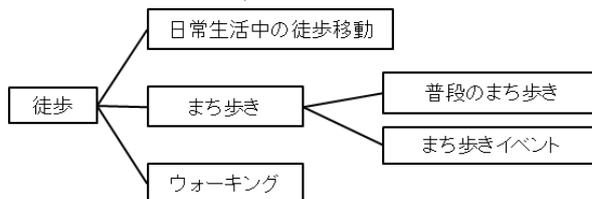


図1 徒歩とまち歩きの概念図

地域への愛着は人と場所との感情的なつながりであると考え、Hidalgo et al.⁹⁾や引地ら⁵⁾に倣い、地域愛着を「人と地域を結ぶ情緒的な絆」と定義する。また、人の活動する場は街区や学区等の範囲にとどまらないことから、本研究における地域とは、「一定の人付き合いを持つ、普段買い物をする場所や職場などを含めた日常生活の活動を行う範囲」と定義する。

2. まち歩きイベント事例の整理

各地のまち歩きイベントを実施主体、マップやコース、ガイド付きツアーの実施の有無等で整理した。まち歩きイベントの実施目的には、自分の住む街の魅力の再発見と地域密着型観光の二つがあると考えられ、地域の活性化を住民の意識向上と経済効果の両面から狙っているとみられる。大掛かりな準備が必要ない点、知識の獲得や街の人との交流が可能な点が魅力だが、歩行空間の整備、コース・マップ・ガイド等の質の確保、地域と協力した持続的な経営等を考えて行う必要があると考えられる。

3. 「長崎さるく」と調査の概要

(1)長崎さるく

本研究で対象とする「長崎さるく」は長崎市で行われているまち歩きイベントで、各地のまち歩きイベントの中でもまち歩きブームの始まり⁹⁾とも言えるものである。最初は「長崎さるく博」として2004～2006年に実施され長崎市内外から多くの人を集め、2007年以降は通年で行われている。さるく博は「市民が主役」を掲げ、地域資源を活かし、長崎の街全体を堪能できるようなまち歩きイベントとして企画され、300名以上の地域住民による専門ガイドがさるくを支えている。表1のように4種類のさるくがあり、コース・テーマも多彩に用意されている。いつでもどこでもさるくを気軽に行うことができるのが強みである。

表1 さるくの種類と内容

	種類	内容(2014年2月現在)
ガイドツアー型	遊さるく	<ガイドなしで自由気ままに長崎散策>マップ通りにあちこち立ち留まりながらゆっくり歩いて約1時間半となるようコースを設定。定番コースから路地探検などマニアックなコースまで全45コース。
	通さるく	<長崎名物・ガイドツアー>街を知り尽くした名人ガイドによるガイド付きの街歩き。定番コースは全29コース。
	学さるく	<専門家の講座+ガイドツアー>参加型の講座や専門の先生による1テーマを掘り下げた講座など、長崎の暮らしや知識を深く学べるツアー。
	食さるく	<ガイド付きで長崎ならではの“食”を満喫>食の達人による講座、とっておきの食事、お菓子作り体験などを体験できるツアー。

(2)Web アンケート調査の概要

まち歩き行動の実態把握、まち歩きやまち歩きイベントと地域愛着の関係性、まち歩きイベント参加者の傾向を把握するためWeb アンケート調査を行った。概要を表2に示す。対象は長崎市民とし、さるく経験者200名、さるく未経験者200名の計400名から回答を得た。なお、さるく経験者とは、「過去に1回以上長崎さるくに参加したことがあり、かつ参加時点で長崎市民であった人」を指し、さるく未経験者は「現在長崎市民で、過去に一度も長崎さるくに参加したことがない人」を指す。調査においては、さるく経験者は自由抽出、さるく未経験者は長崎市の性・年齢階層別人口構成に基づいて抽出を行った。質問内容としては、年齢・性別・家族構成・居住年数・余暇時間・目的(通勤通学・買物・飲食等)別の普段の交通手段等の一般的な属性、まち歩きマップやまち歩きイベント等への意識、地域愛着(大谷・芳賀⁷⁾による13の質問)、普段のまち歩き行動(場所、頻度、立ち寄り場所等)を尋ね、更にさるく経験者に対しては参加したさるくに関する質問(さるくの種類、回数、テーマに加え、遊さるくのみ参加者と通学食さるく参加者に分けて初参加時の参加理由、満足度等)を行った。

表2 Web アンケート調査の概要

調査期間	2013年3月29日～31日
調査対象	さるく経験のある(参加当時)長崎市民200名 さるく未経験の現長崎市民200名 計400名
回答者属性	男性208名 女性192名 年齢平均45.74歳(最低20歳、最高69歳)
質問内容	一般的な属性 まち歩きイベント等への意識に関する質問 地域愛着に関する質問 普段のまち歩きに関する質問 さるくに関する質問(さるく経験者のみ)

4. 基礎的な集計分析

(1)地域愛着の尺度

まず、地域愛着の尺度について説明する。主成分分析を行ったところ萩原・藤井⁸⁾が行った主成分分析と同様に3つの主成分が得られたため、萩原・藤井に倣い、「地域愛着(選好)・「地域愛着(感情)」・「地域愛着(持続願望)」の3尺度を用いた。

地域愛着(選好)は、個人的な嗜好の観点から地域に対する単純な好き嫌いの程度を表す尺度である。地域愛着(感情)は、地域を大切に思い、愛着を感じ、住み続けたいと感じる意識を表す尺度である。地域愛着(持続願望)は、地域そのものの在り方に対する願い、永續願望を表す尺度である¹⁰⁾。地域愛着(選好)・地域愛着(感

情)・地域愛着(持続願望)にそれぞれ含まれる下位尺度は表3のようになっており、各質問は1「そう思わない」～5「とてもそう思う」までの5件法で設定されている。3尺度の得点は表3に示した下位尺度項目の平均点で算出しており、各尺度の信頼係数(クロンバックの α 係数)は表3の通り十分な水準であった。

既往研究¹⁰⁾では、これらの3つの尺度の間には醸成期間に差があり、地域愛着(選好)が比較的短期間で醸成されるのに対し、地域愛着(感情)と地域愛着(持続願望)は地域愛着(選好)の影響を受けつつ、比較的長期に醸成されることが理論的に想定されている。なお、本調査における各因子の相関係数は選好—感情間が0.783、選好—持続願望間が0.670、感情—持続願望間が0.714となり、高い相関があることが確認された。

表3 地域愛着の尺度の構成項目と信頼係数 α

地域愛着(選好) ($\alpha=.923$)	
地域は住みやすいと思う	SD(3.92)
地域にお気に入りの場所がある	SD(3.46)
地域を歩くのは気持ちよい	SD(3.63)
地域の雰囲気や土地柄が気に入っている	SD(3.67)
地域が好きだ	SD(3.70)
地域ではリラックスできる	SD(3.75)
地域愛着(感情) ($\alpha=.907$)	
地域は大切だと思う	SD(3.95)
地域に愛着を感じている	SD(3.67)
地域に自分の居場所がある気がする	SD(3.46)
地域は自分のまちだという感じがする	SD(3.41)
地域にずっと住み続けたい	SD(3.40)
地域愛着(持続願望) ($\alpha=.909$)	
地域にいつまでも変わってほしくないものがある	SD(3.47)
地域になくなってしまうと悲しいものがある	SD(3.46)

(2) 普段のまち歩き頻度による違い

普段のまち歩きとは、日常生活において「住宅地」・「商店街や駅前などの街なか」・「街の中で、緑等が多い自然豊かな場所」でどの程度まち歩きを行うかを問うたものであり、各場所におけるまち歩きの頻度は表4のようになった。各場所でのまち歩き頻度で3グループにわけ、地域愛着についてノンパラメトリック検定(以降JT検定)を行った。JT検定はノンパラメトリック検定の一種で、データの増減等の傾向性の有無を検定するものである。この結果、住宅地・街なか・緑のいずれの場所においてもまち歩き頻度が高いほど地域愛着が有意に高い傾向が示された(表4)。

(3) さるく経験者と未経験者の違い

さるく経験者には30・40代の女性と40・50代の男性が多く、20代の男女と60代の女性が少なく、正規の職

員と専業主婦が多く、無職の人が少なかった。

「(旅行先等で)通・学・食さるくのようなガイド付きまち歩きイベントがあった際に参加したいと思うか」というまち歩きイベントへの参加意思を問うた質問においては、さるく経験者の9割近くが「積極的に参加したい」か「都合が合えば参加したい」と参加意思を示したのに対し、さるく未経験者は半数程度しか参加意思を示さず、差が見られた(図2)。さるく未経験者の中で、まち歩きイベント参加意思がある人には女性が多く、まち歩きイベントの潜在的な需要を示唆している。

表4 普段のまち歩き頻度と地域愛着のJT検定

		1. しない	2. 週1回未満	3. 週1回以上
頻度		147 (36.8%)	142(35.5%)	111(27.8%)
住宅地	選好	4.093(0.946)	4.414(0.832)	4.584(0.777)
	感情	3.373(0.910)	3.634(0.795)	3.770(0.798)
	持続願望	3.230(1.026)	3.486(0.878)	3.644(0.964)
頻度		52(13.0%)	222(55.5%)	126(31.5%)
街なか	選好	3.903(0.950)	4.339(0.881)	4.533(0.793)
	感情	3.269(0.926)	3.536(0.847)	3.771(0.791)
	持続願望	3.096(1.015)	3.441(0.949)	3.646(0.937)
頻度		79(19.8%)	224(56.0%)	97(24.3%)
緑	選好	3.926(0.868)	4.341(0.853)	4.689(0.820)
	感情	3.195(0.871)	3.560(0.825)	3.922(0.769)
	持続願望	3.050(1.011)	3.442(0.928)	3.840(0.8750)
JT検定	地域愛着(選好) t値	地域愛着(感情) t値	地域愛着(持続願望) t値	
住宅地	4.717	3.891	3.171	
街なか	3.872	3.762	3.545	
緑	6.047	5.954	5.605	

注：選好・感情・持続願望は平均値(標準偏差)

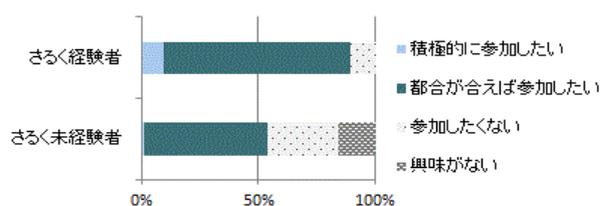


図2 まち歩きイベントへの参加意思

(4) 参加の積極性と参加回数による違い

さるく経験者の初参加時の参加理由を見ると、自分からではなく、人から誘われて参加した人が3割程度いる(図3)。前述したまち歩き参加意思のあるさるく未経験者が誘われて参加したような状況だと推測される。

友人・家族に誘われた人を消極的参加者(66名)、自分から参加した人を積極的参加者(137名)と分類すると、積極的参加者の方が消極的参加者よりもさるく参加回数(図4)が有意に多くなった($z=3.0994$ $p<.005$)。し

しかし消極的参加者であっても4割程度はさるくりピーターになっており、さるく経験者全体のリピート率は5割を上回る。更に、さるく参加回数（低・中・高）によってさるく経験者を3グループに分け、地域愛着についてJT検定を行った。その結果、地域愛着（選好）(t=2.251,p<.05)、地域愛着（感情）(t=2.487,p<.05)、地域愛着（持続願望）(t=2.779,p<.05)のいずれも、さるく参加回数が多いほど有意に高いことが示された。

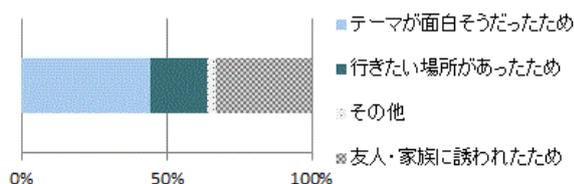


図3 さるく参加理由

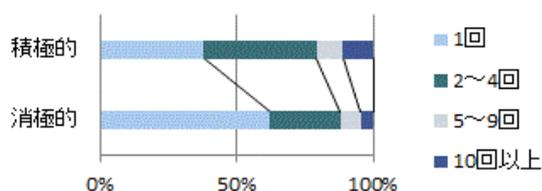


図4 さるく参加回数

(5)参加経験×意向・積極性クラスタによる違い

最後に、さるく未経験者・経験者全体を4つのクラスタに分けて分析を行った。さるく未経験者に関しては前述したガイド付きまち歩きイベントへの参加意思から、「1. まち歩きイベント参加意思なし」(92名)と「2. まち歩きイベント参加意思あり」(108名)の2つ、さるく経験者に関しては、さるくの参加理由から「3. さるく消極的参加者」(66名)と「4. さるく積極的参加者」(134名)の2つに分けた。この4クラスタにおいて、住宅地・街なか・緑のなかにおける普段のまち歩きの頻度に関してそれぞれJT検定を行ったところ、1.<2.<3.<4.の順に、普段のまち歩きの頻度が有意に多くなることが示された。図5は街なかにおけるまち歩き頻度をグラフにしたものであるが、他の2つの場所についても同様の順に有意に増加することが示された。

更に同じ4つのクラスタについて、3つの地域愛着に関してJT検定を行ったところ、同じく1.<2.<3.<4.の順に、地域愛着（選好）・（感情）・（持続願望）のいずれもが高くなる傾向が示された。

このように、さるく未経験者、さるく経験者の中でも段階的に普段のまち歩きの頻度及び地域愛着が高くなる傾向が示された。このことから、普段のまち歩き頻度と地域愛着の相関だけでなく、さるくへの参加の有無や参加の仕方も地域愛着に関係することが推察される。

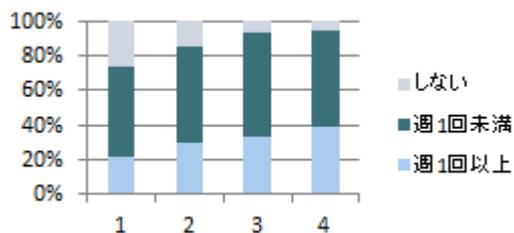


図5 4つのクラスタ別街なかまち歩き頻度

表5 4つのクラスタと地域愛着

地域愛着	1.	2.	3.	4.	JT 検定 t 値
選好	3.399 (0.868)	3.647 (0.774)	3.699 (0.744)	3.908 (0.669)	4.642
感情	3.254 (0.877)	3.493 (0.880)	3.627 (0.801)	3.837 (0.769)	4.950
持続願望	3.060 (0.977)	3.398 (1.006)	3.591 (0.774)	3.724 (0.931)	4.887

注：上段は平均値、下段は標準偏差。

5. まち歩きと地域愛着の因果構造の検討

前章の分析結果と既往研究を踏まえ、まち歩きと地域愛着に関する因果構造を検討し、共分散構造分析を行った。

(1)仮説と変数及びパスの設定

まず仮説として、既往研究で示唆された日常生活における徒歩移動⁷⁸⁾や居住年数⁵⁶⁾が地域愛着に影響を与えるのに加え、「普段まち歩きを行うことやまち歩きイベントに参加することで、人はまちの良さに気づき、地域愛着に影響を与える」という因果関係を検討した(図6)。

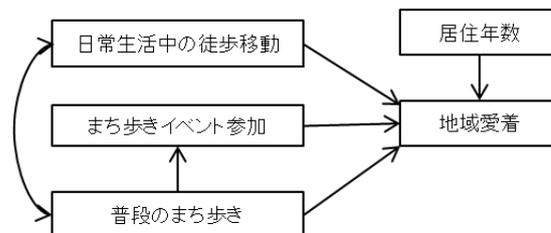


図6 まち歩きと地域愛着の関係に関する仮説

共分散構造モデルの推定にあたっては、図5の仮説に基づき、次のような変数の定義及びパスの設定を行った。潜在変数、観測変数は【潜在変数】、[観測変数]で記す。

- 【日常生活の徒歩移動】: 潜在変数として【日常生活の徒歩移動】を設定した。【日常生活の徒歩移動】は日常的な活動の実行のために生じる徒歩を想定している。観測変数[通勤通学ダミー]・[買物_食料品等ダミー]・[買物_衣服等ダミー]・[飲食ダミー]はそれぞれ通勤通学・買物・飲食等の各目的で主に利用する交通手段として徒歩を挙げたか否かを表したもので、【日常生活の徒歩移動】から影響を受ける。既存研究⁷⁸⁾より、

【日常生活の徒歩移動】は地域愛着に影響を与えると想定した。

- 【普段のまち歩き】:潜在変数として【普段のまち歩き】を設定した。観測変数[まち歩き頻度_住宅地]・[まち歩き頻度_街なか]・[まち歩き頻度_緑]は各場所における普段のまち歩き頻度を問うたもので、【普段のまち歩き】から影響を受ける。各場所での普段のまち歩き頻度が高いほど地域愛着が高いという表4の結果より、【普段のまち歩き】が地域愛着に影響を与えると想定した。また、普段のまち歩きの頻度と各目的で主に利用する交通手段として徒歩を挙げたか否かに弱い相関がみられたため、【普段のまち歩き】と【日常生活の徒歩移動】の間に共分散を設定した。
- 地域愛着：地域愛着は3尺度[地域愛着(選好)]・[地域愛着(感情)]・[地域愛着(持続願望)]を観測変数としてモデルに含めた。既往研究³⁾より、[地域愛着(感情)]と[地域愛着(持続願望)]は[地域愛着(選好)]から影響を受ける構造が存在することから、パスを設定し、[地域愛着(感情)]と[地域愛着(持続願望)]の間には誤差の共分散を想定した。
- [長崎さるく参加]：長崎さるくへの参加経験の有無を観測変数として設定し、地域愛着に影響を与えることを想定した。また、さるく経験者の方が未経験者よりも普段のまち歩き頻度が高いという前述の調査結果より、【普段のまち歩き】が[長崎さるく参加]に影響を与えることも想定した。
- [居住年数]：地域愛着に影響を及ぼす因子として、長崎市内での居住年数を観測変数として設定した。

(2)モデルの推定結果

以上の仮説に基づいたモデルの推定結果を図7に示す。適合度指標は図中に示したとおりで、このモデルの適合

度は十分に高い。図中のパスの係数は標準化された数値で、全て5%有意である。この他にも様々なパスの引き方でモデル推定を試みたが、係数の有意性やモデル全体の適合度から、このモデルが最善であると判断した。

図7より、【日常生活の徒歩移動】・【普段のまち歩き】・[長崎さるく参加]が[地域愛着(選好)]に正の影響を与えている。また、【普段のまち歩き】が[長崎さるく参加]にも正の影響を与えることが示されたことから、【普段のまち歩き】が[長崎さるく参加]を通じて間接的にも[地域愛着(選好)]に正の影響を与えることが明らかになった。以上のことから、まち歩き及びまち歩きイベントが地域愛着に正の影響を与えるという仮説は支持されたと言える。【日常生活の徒歩移動】・【普段のまち歩き】・[長崎さるく参加]から[地域愛着(感情)]・[地域愛着(持続願望)]への各パスは検討したが有意にはならなかったことから、これらの行動は長期的に獲得される地域愛着ではなく短期的に獲得される地域愛着にのみ影響を与えると考えられる。更に、【日常生活の徒歩移動】と【普段のまち歩き】の間に正の相関が認められたことから、普段から徒歩で移動することが歩くことへの心理的障害を取り払い、街を楽しんで歩くことに繋がることが示唆される。

一方、[居住年数]は短期的に獲得される[地域愛着(選好)]だけでなく、長期的に獲得される[地域愛着(感情)]にも正の影響を与えることが示された。[地域愛着(持続願望)]への影響は有意ではなく、地域の永続を願う感情は居住年数から直接影響を受けるのではなく他の要因と相まって間接的に醸成される可能性が考えられる。地域愛着の3尺度の中では、[地域愛着(選好)]が[地域愛着(感情)]と[地域愛着(持続願望)]に影響を与えるという、既往研究⁹⁾を支持する結果が得られた。

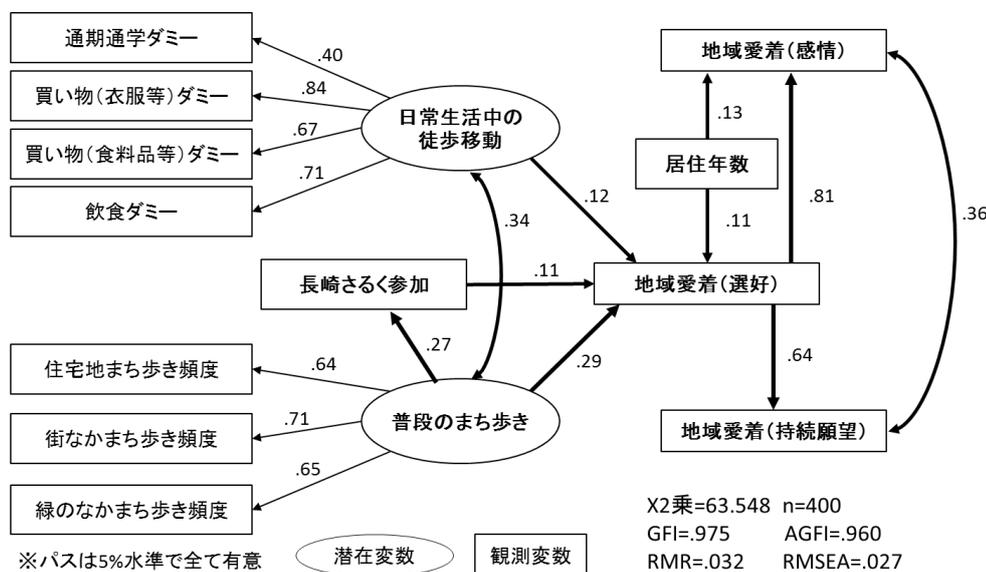


図7 まち歩きと地域愛着に関する因果構造のモデル

[地域愛着（選好）]に影響を与える各パスの標準化係数を比較すると、【普段のまち歩き】の係数が他の2倍以上と高い数値であり、影響が大きいと考えられる。同様に、【日常生活の徒歩移動】や[長崎さるく参加][居住年数]と同程度の影響を[地域愛着（選好）]に与えると推察できる。

6. 結論と今後の課題

(1)結論と考察

本研究では、地域愛着が地域での活動や都市計画に有用な概念であるという考えの下、まち歩きイベント「長崎さるく」が定着している長崎市を例に取り上げ、まち歩き及びまち歩きイベントへの参加に関する意識や行動の実態と、それが地域愛着へ与える影響を明らかにした。

具体的には、さるくに参加する人はガイド付きまち歩きイベントへの参加意思が強い人で、普段のまち歩きの頻度も高いことが明らかになった。また、さるく未経験者の中でもガイド付きまち歩きイベントに参加したいと考える人が一定数存在することから、このような人を誘うことでまち歩きイベント参加者を増やすことも可能であると示唆される。さるく経験者の中には、人から誘われて参加した消極的参加者とテーマ等が面白そうで自分から参加した積極的参加者がおり、積極的参加者の方がさるく参加回数が多くレポートしやすいことが示唆される。傾向分析から、まち歩きイベント参加意思のないさるく未経験者、まち歩きイベント参加意思のあるさるく未経験者、さるく消極的参加者、さるく積極的参加者の順に普段のまち歩きの頻度及び地域愛着が高いことも示された。

更に、共分散構造分析により、既存研究の多くで言われている居住年数に加え、普段からまち歩きをすること、日常生活の移動に徒歩を利用すること、長崎さるくに参加することが地域愛着を高めるという因果構造が示された。普段のまち歩きに関しては、居住年数や日常生活の徒歩移動よりもその影響が大きいこと、普段からまち歩きをすることが長崎さるくへの参加にも正の影響を及ぼすことが示された。

以上のことから、まち歩きやまち歩きイベントへの参加が地域愛着の醸成に影響を与えることが示された。従って、地域愛着醸成のために、普段からまち歩きを行うことや長崎さるくのようなまち歩きイベントを取り入れていくことが、街に対する意識を高め、地域への積極的な関与に繋がっていくことが示唆される。

(2)今後の課題

上述のように普段からまち歩きをすることや長崎さ

るくに参加することが地域愛着を高める一方で、他の要因から地域愛着が高い人が、街をより良く知ろうと考えまち歩きをしたり長崎さるくに参加したりする、という逆の方向も十分考えられ、スパイラル的な構造を持つ可能性があることは否めない。今回の分析においては、地域愛着から普段のまち歩きやさるく参加への逆の因果関係も検討したところ有意とはならなかったが、更なる検討の余地があると考えられる。

また、さるく参加回数が多くなると地域愛着が高くなるという傾向も示すことができたが、さるくに複数回参加した人のサンプルの少なさから普段のまち歩き頻度等の他の要因と絡めた検討が不十分であった。

今回のデータは1時点でのデータであり、参加前後での行動や意識の変化を継続的に捉えたものではないことから、実際のまち歩きイベント及びその参加者に焦点を当てたパネル調査を行い、更に深く精緻に研究していく必要があると言えよう。

更に、まち歩きやまち歩きイベントを地域愛着醸成のための施策として検討していく中では、地域愛着を醸成する様々な要因の中でまち歩きやまち歩きイベントがどの程度重要なものか等を明らかにしていく必要があると考えられる。

参考文献

- 1) 石盛真徳：コミュニティ意識とまちづくりへの市民参加：コミュニティ意識尺度の開発を通じて、コミュニティ心理学研究, 日本コミュニティ心理学会, Vol.7, No.2, pp.87-98, 2004
- 2) 若林直子・赤坂剛・小島隆矢・平手小太郎：住民の防災意識の構造に関する研究—その3:地域コミュニティとの関わりを表す項目を含む因果モデル—, 日本建築学会学術講演梗概集, D-1, pp.807-808, 2000
- 3) 鈴木春菜・藤井聡：地域愛着が地域への協力的行動に及ぼす影響に関する研究, 土木計画学研究・論文集, Vol.25, No.2, pp.357-362, 2008
- 4) 引地博之・青木俊明・大淵憲一：地域に対する愛着の形成機構—物理的環境と社会的環境の影響—, 土木学会論文集D, Vol.65(2), pp.101-110, 2009
- 5) Brown, B. Perkins, D.D. and Brown, G.: Place attachment in a revitalizing neighborhood in a revitalizing neighborhood Individual and block levels of analysis, Journal of Environmental Psychology, Vol.23, pp.259-271, 2003
- 6) Hidalgo M.C. and Hernandez, B.: Place Attachment: Conceptual and Empirical questions, Journal of Environmental Psychology, Vol.21, pp.273-281, 2001
- 7) 大谷華・芳賀繁：地域交通環境の利用が高齢住民の地域感情に及ぼす影響, 立教大学心理学研究, Vol.45, pp.01-09, 2003
- 8) 萩原剛・藤井聡：交通行動が地域愛着に与える影響に関する分析, 土木計画学研究・講演集, Vol.32, in CD-ROM, 2005
- 9) 茶谷幸治：まち歩きが観光を変える, 学芸出版社, 2008
- 10) 鈴木春菜・藤井聡：「地域風土」への移動途中接触が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究, 土木学会論文集D, 64(2), pp.179-189, 2008